

(平成30年6月22日)

第29回 赤松小三郎研究会のご報告

日時： H30. 6. 19 (火) 18:30～21:00

場所： 東京・文京シビックセンター 4F B会議室

出席者： 19名

< 配布資料 >

資料—1 〈講演会・シンポジウム 明治維新150年～激動の時代と人物を考える〉参加報告 白井亜希氏作成

資料—2 建白七策を再検証する(何を参考に記述したかを考察) —類似の建白書や史料を調査して判ったこと— 石川浩氏作成

< 内容 >

- ・上田先人館の設立について、成田邦夫氏と、丸山瑛一顧問から現在までの経過と今後の見通しについてお話しがあった。
- ・8月5日、尾崎行也氏講演会の現在までの出席者状況について事務局から報告。
- ・大蔵八郎氏(万延元年遣米使節団研究会、彰義隊研究会)が初参加される。
- ・一昨年の講演会講師の桐野作人氏にご参加(石川浩氏がお誘いする)

1. 〈講演会・シンポジウム 明治維新150年～激動の時代と人物を考える〉参加報告 白井亜希氏

2.

- ・薩摩藩の武士階級の人口比率は37.3%で、他藩に比べると武士の割合がかなり多い(他藩は5%～7%)
- ・薩長同盟に関する新史料の紹介 「京坂書通写 慶応二年丙寅正月」
慶応2年、坂本龍馬と三吉慎蔵が伏見の寺田屋で伏見奉行所の役人に襲われた際、現場に残された文書を鳥取藩の人が伏見奉行所で一瞥した印象を書き留めたもの。
詳細は白井亜希氏作成の報告書を3ページ以降に添付しますのでそちらをご参照ください。

2. 建白七策を再検証する(何を参考に記述したかを考察) —類似の建白書や史料を調査して判ったこと— 石川浩氏

- ・慶応三年五月に赤松小三郎は、松平春嶽、島津久光、幕府にたいして建白七策を建言しているが、それらの内容の差異について考察している。
- ・小三郎の建白書にある「二院制」は松平春嶽が文久3年頃に書いた「虎豹変革備考」の中で既に論じられている。春嶽は「大英国志」を参考に「虎豹変革備考」を記述したといわれている。
- ・嵯峨根良吉の「時勢改正」は慶応3年5月に薩摩藩へ提出したといわれている。小三郎の建白書とほぼ同時期。原本は見つかっていない。包み紙だけが黎明館に保存されている。

- ・ 小三郎の建白書は薩摩側からは「幕府寄り」と解釈されそうな表現である。現代語訳で表現するが「・・・総理大臣は将軍、公家、各藩主、旗本の内から学問があり・・・」、「・・・上院は公家藩主、旗本より投票で選んだ三十人を・・・」
- ・ 上記の表現から薩摩藩上層部は、小三郎は幕府寄りと判断したと思われる。これが小三郎暗殺の要因になったと推測する。
- ・ 薩摩宛ての建白書に「幕薩一和」という表現を記載しなかったか悔やまれる。

以上

小山平六（62期）

次ページ以降に白井亜希氏作成の報告書

第 29 回赤松小三郎研究会
〈講演会・シンポジウム 明治維新 150 年～激動の時代と人物を考える～〉
参加報告

平成 30 年 6 月 19 日 白井亜希

昨年 12 月 2 日 新宿京王プラザホテルにて。

当日会場では、研究会の滝澤さん・沓掛さんと偶然お会いしました。

会費 1000 円のためか、定員 600 名のところ 1200 名近い応募が。

9:40 から 12:00 まで 2 時間 20 分。

前半：基調講演 『西郷どん』と薩摩藩 桐野作人氏

後半：シンポジウム 桐野作人氏（司会） 伊東成郎氏 齊藤洋一氏

知野文哉氏 町田明広氏

基調講演 『西郷どん』と薩摩藩 桐野作人氏 の概要

以下の 4 点に絞って、講演されました。

1. 薩摩藩の地理的環境と武士人口
2. 天保の改革と薩摩藩の借金
3. 西郷の名前の変遷と意味
4. 薩長同盟に関する新史料の紹介

1. 薩摩藩の地理的環境と武士人口

薩摩藩は江戸初期に琉球に侵攻し、以来鹿児島から南に 1000 km にもおよぶ領域を支配していたことになり、日本の中でも特異な地理的環境にあったということが、幕末期の活躍にも影響していると言えるのではないかと。

表：文政 9 年(1826)鹿児島藩三カ国の身分階層別の国・地域別人口（奄美・琉球は含まず）によれば、薩摩藩の武士が占める割合は 37.3%（他藩では 5~7% といったところ）

他藩よりも武士の数が多いため、ポストをめぐる競争社会であったことは確かである。そのため、理系の技術者や語学のエキスパートなど抜きんでた人材が現れるようになる。

表：弘化 4 年(1847)頃 薩摩藩における武士身分の階層別構成 によれば、

「城下士(直臣)」と呼ばれる上級武士にあたるのは上位 10%のみ。「城下士」は「上士」と「平士」にわかれ、西郷・大久保・伊地知・大山・有村・有馬・中村半次郎などは、「平士」の中でも一番下「小姓与」(30~150 石)という身分にあたり、この上位 10%に入る。決して低い身分とは言えなかった。ちなみに、小松帯刀は一所持という身分で石高は 3600 石。

2. 天保の改革と薩摩藩の借金

天保年間、家老として藩財政担当に調所広郷がついたことが、薩摩藩にとって大きな転換を招くことになった。

図：薩摩藩の借金表（調所一郎氏提供）より

1616 年（元和二年）2 万両だった借金が、1632 年（寛永九年）14 万両、

1640 年（寛永十七年）34.5 万両、1749 年（寛延二年）56 万両、

1754 年（宝暦四年）66 万両、1801 年（享和元年）117 万両、

1807 年（文化四年）126 万両、1827 年（文政十年）には 500 万両に膨れ上がった。

* 薩摩藩の年収であるが、文化十二年(一八一五)に島津重豪が儉約を命じた文書の中で、一ヶ年の産物収入がおよそ十四万両であることが述べられている。

調所による財政立て直しにより、借金はチャラになり、更に 150 万両の貯金をつくることができた。とかく指摘される密貿易による収入はわずかなものだったらしい。

以下は、4月19日放送『英雄たちの選択』～幕末秘録・琉球黒船事件 調所広郷 命をかけた秘策～より、まとめました。

調所広郷（1776～1848）貧しい家に生まれ、13歳で茶道の家に養子に入る。剃髪し茶道坊主として働き、23歳で江戸行き、島津重豪付になる。藩主に近づけたことが好転し、文政11年（1828）武士に戻り、財政改革主任に抜擢される。

改革のやり方としては、借金のことを大坂商人に打ち明け、黒砂糖の取扱権を担保に。奄美大島の砂糖の生産量すべてを薩摩藩に納入させ、それを大坂商人に売りさばかせた。

元金千両につき、年四両の利息で返済。250年割賦を強引に了承させた。

また、北海道の昆布を富山藩を通じて入手し、琉球から清国に輸出。その売り上げで、木香・白檀などを清国から輸入し、国内で売りさばくなどのこともしている。当時、貿易は幕府独占のものとされていたが、薩摩藩は例外的に、琉球を通じての一部の薬種の輸入販売を許されていた。調所はそれをいいことに、規制量を超えて売買し利益を得ていた。

天保11年(1840)財政改革にめどがつかないあかしとして、京都北野天満宮に斉興の名で金灯籠が奉納されている。50万両の備蓄金も蓄えられていた。

アヘン戦争に勝ったイギリスは香港を割譲するなど權益を手に入れたが、それに出遅れたフランスが1844年琉球に来航、通商を求めてきた。時の老中阿部正弘は調所に100名の派兵を命じる。

薩摩藩にとって事態は、黒糖価格の低落、唐物貿易（清国との貿易か？）免許停止など、財政改革に暗雲が垂れ込める。フランスとの交渉は薩摩に一任されるが、琉球の反対にあい通商は叶わず。

次の藩主の座を狙う斉彬は、調所の密貿易をたくらんでいた事実や琉球派兵の数を虚偽申告していたことなどを切り札に調所一派を掃討しようとした。そんななか嘉永元年(1848)調所が死去。服毒自殺ということになっている。

同じころ、長州では撫育金と呼ばれる裏金制度による改革が行われている。

薩摩も長州も幕末にかけて、いざという時に使える資金を十分に蓄えていたことになる。それが活躍の原動力でもあったといえる。

3. 西郷の名前の変遷と意味

文政10年(1827)12月7日 生誕、幼名「小吉」

天保12年(1841) 元服、「吉之介隆永」と名乗る

嘉永6年(1853)3月1日 「善兵衛」に改名

安政3年(1856)3月までに「吉兵衛」に改名

安政5年(1858)10月6日 藩命により「三助」と改名

同年12月下旬 奄美潜伏にあたり「菊池源吾」と改名

文久2年(1862)2月15日 奄美から帰還し、「大島三右衛門」と改名

元治元年(1864)3月頃 沖永良部島から帰還後、「大島吉之介」と改名

同年10月頃 「西郷吉之助」と改名

慶応3年(1867)10月14日 討幕の密勅請書に「西郷吉之助武雄」と署名

明治2年(1869)12月頃 「西郷隆盛」と名乗る*

同3年(1870)3月頃 大山巖の上京を祝す漢詩に「西郷隆永」と署名

同5年(1872)8月 横山安武の顕彰碑に「西郷隆永」と署名

「隆盛」という名前は、父の名前であった。本名は「隆永」という。

* 西郷の功勞を称え叙勲をするという時に、関係者は誰も西郷の本名を知らなかった。たまたま幼馴染の吉井友実が思い出し、間違っただけで伝えた。別の人間がそのまま政府に届け出てしまったので、後になっては恐れ多く変更できなかった。

4. 薩長同盟に関する新史料の紹介

坂本龍馬没後 150 年記念特別展 龍馬がみた下関 @下関市立歴史博物館

文書「京坂書通写 慶応二年丙寅正月」の内容

～土佐を脱藩して薩摩藩に入り込み、長州へ往来する坂本龍馬は、先月二四日に京都を出立して伏見の寺田屋に一泊した。そこで、召し捕らえられそうになったが、ようやく切り抜けて伏見の薩摩藩邸に逃げ込んだ。

所持品は寺田屋に残っており、その中には、(薩摩藩が)長州人と相談していたことを記した書面*等があった。その内容は、長州藩が寛大な処置を決して請け入れず、反対に率兵上京して朝敵からの回復を歎願するため、その際に(薩摩藩が)会津藩を京都から追払うことを約束した返答などであった。

すでに、龍馬が召し連れていた家来は、長州人であった。～

* 書面の宛名は木戸孝允であった。

「木戸孝允文書、坂本龍馬宛書翰（慶應二年正月二十三日）」に記載されている薩長同盟6カ条のうち第5条「兵士をも上國之上橋曾桑等も如只今次第にて勿體なくも朝廷を擁し奉り正義を抗み周旋盡力之道を相遮り候ときは終に及決戦候外無之との事」と関わる内容と思われる。

新史料として紹介された。

シンポジウムの概要：桐野作人氏の司会により各パネリストがそれぞれのテーマに基づき発表。

桐野作人氏 薩摩藩：明治維新に果たした薩摩藩の役割とは

薩摩が明治維新で主導的な役割を果たした要因は・・・

- ①日本列島で見れば南の辺境の薩摩だが、アジア的な視野で見ると南の玄関口となり、中国や西洋諸国の文物・情報に真っ先に接することができた。琉球を支配していたため、対外関係には敏感だった
- ②幕府の「鎖国」体制にほころびが生じてくると、その地理的環境から幕府や他藩に先駆けて海防・外交的危機感を察知し、その対策の必要性を意識する。歴代藩主の海外情報への関心の高さ、欧米諸国との関係や国際秩序における日本の地位をいかに確立するかなど大局的な観点を藩全体で持てた。
- ③調所広郷による天保の改革で財政的に有利になれた。
- ④尚武の国柄ということもあり、内外の最新軍事学に関心が高い。
- ⑤他藩にくらべて、比較的有能かつ開明的な藩主がいたので、多方面の人材育成に優れていた。政治家・軍人・技術系テクノクラート（経済・科学・軍事・語学など）を多数輩出。

齊藤洋一氏 幕府：2つの150周年

2017年は1867年パリ万博に日本が参加して150年の年。

パリ万博参加は家茂の時に決定し、慶喜が実行に移した。慶喜は弟の明武を將軍名代として派遣。松平容保の養子になることが決まっていた明武を強引に將軍家(清水家)へ迎え入れ、次期將軍の有力候補という身分を与えてパリへ派遣。13歳の明武は將軍名代として、並み居る王族にひけをとらない役割を果たした。

また 2017 年は幕府が政権を帰してから 150 年の年でもある。慶喜はパリ万博派遣の折、幕府再生のための巨額の資金調達をフランスで試みたが失敗に終わる。慶応 3 年 7 月に失敗に終わった知らせは 9 月末には日本に届いていたと思われる。その直後に慶喜は政権を朝廷に帰す決断をしている。松戸市戸定歴史館所蔵の文書によると「政権を朝廷二奉歸」と記されている。いわゆる「大政奉還」という文言はどこにもなく、どこで書き換えられたのか疑問が残る。「大政奉還」というと、明治神宮聖徳記念絵画館の壁画(邨田丹陵・作)をイメージするが、絵画化されたことでの用語ではなかったか。

慶喜は天皇の玄孫でもあり、幕府・朝廷のあいだで板挟みの状態であった。慶応 3 年 10 月 11 日板倉宛書簡には「策が尽きた」との記述があり、「慙愧に絶えない」という心の内も吐露している。

一方、薩摩もパリ万博には出品しており、日本の中央政府は幕府ではないという外交宣伝もしていた。

伊東成郎氏 新撰組：近藤勇と「沸騰」

近藤勇は天領武州多摩の出身、尊王の思いに加え出自ゆえの將軍家への畏敬の念も併せ持った人物だった。もともとは攘夷集団だった近藤らは浪士から旗本に取り立ててもらい、幕府一筋となる。

資料：「坂本・中岡を斬った人」伊藤痴遊 昭和 10 年(1935)

この中で、坂本・中岡の襲撃に行ったのは今井信郎ほか 6 人でそれを率いていたのが会津藩の佐々木只三郎であったこと、新撰組は無関係であったこと、今井は「禄七十俵の處、右功(龍馬暗殺)により六百俵に加俸相成」となったこと、などが記されている。

町田広明氏 長州藩：長州藩と「攘夷」「長州ファイブ」「薩長同盟」

幕末の政争の論点・・・未来攘夷 VS. 即時攘夷

文久・元治年間、長州は政争の中心にいたが、八月十八日の政変や禁門の変で大敗することにより存亡の危機に立たされるが、実はこのころから、薩摩からのアプローチが始まっている。長州をつぶしてはいけないという思いから、吉川が間に入って動いていた(関ヶ原を彷彿とさせるエピソード)。

一方長州にとっては、征長戦争を戦い抜くために、どうしても薩摩との同盟は必要だった。

知野文哉 土佐藩：慶応三年の坂本龍馬

「船中八策」はフィクション。

龍馬は武力討幕を否定していない。後藤に大政奉還を提言した可能性は高いが、龍馬にとって大政奉還はあくまでも幕府を倒す手段のひとつに過ぎず、土佐が薩長に乗り遅れないことが大事だった。

終生土佐を愛し、土佐の利益のために行動することを望んでいたが、土佐藩はその龍馬を評価していなかった。

龍馬が一番信頼していた人物：西郷と大久保一翁「自分が戦死しても、この二人が香花を手向けてくれれば、成仏することは間違いない」と言っていた。

龍馬が周旋したとされる薩長同盟も、薩摩の庇護のもと、薩摩の意向で動いていたに過ぎない。

司馬遼太郎『竜馬がゆく』は昭和 37 年から連載が始まり、高度経済成長期に読まれた。

以上、皆さん時間に追われての発表となり、十分にはお話しできなかつたご様子です。